

モンゴル語古訳本『孝経』における 正書法上の一特徴

栗林 均

1. モンゴル語古訳本『孝経』について

中国の正史の一つである『元史』によれば、モンゴル族は13世紀初頭にウイグルの文字をもって自らのことばを記録するようになったという。ウイグル文字でモンゴル語を表記する「モンゴル文語」は、以来700年以上にわたってモンゴル族の書き言葉として用いられてきた。

モンゴル文語は16～17世紀のモンゴルのいわゆる「仏教ルネサンス」を境目に大きな変容をとげる。チベット仏教の大々的な受容に呼応して、大量の仏典がモンゴル語に翻訳され、その為にはモンゴル文語の正書法が整理され、文法書や術語集・対訳辞典が編纂された。文字の字形も、従来のウイグル式の字体からモンゴル独自の丸みを帯びたものになり、チベット語やサンスクリット語を写すために新たな文字が字母に加えられた。

このように、16～17世紀以降の仏教文典に典型的にみられる規範化されたモンゴル文語と、それ以前の時代に属するモンゴル文語とは、字形・正書法・語法・語彙のいずれにおいても異なった特徴が認められることから、モンゴル語史においては前者を「古典式」、後者を「先古典期」のモンゴル文

語と呼んで互いに区別している。この小論では「先古典期」に属する文献のひとつであるモンゴル語古訳本『孝経』における正書法上の問題を検討する。

『孝経』は、改めて言うまでもなく、孔子が弟子の曾子と問答の形で孝道を説いた書物である。モンゴルにおいては時代的に異なる複数の翻訳が存在するが、ここで取り上げるのは北京の故宮博物院図書館の所蔵になる漢蒙対訳の『孝経』であり、モンゴル語の現存する最も古い訳本として知られる。A. Mostaert とともにこの版本の存在を初めて学界に紹介した W. Fuchs は、最初これを明代の刊本と推定したが、^① 後に再調査の結果、漢字の字体と紙質をもとにこれが元朝の時代のものであり、14世紀前半にまでさかのぼると結論している。^② また、そこに記されているモンゴル文語にしても、字体、正書法、語法、語彙のいずれを取っても「古典式モンゴル文語」とは一線を画する古風な特徴が認められ、典型的な「先古典期モンゴル文語」の文献資料とみなすことができる。(以下、『孝経』と呼ぶのはこのモンゴル語古訳本を指す。)

2. 問題の所在

モンゴル文字では、モンゴル語に存在する /t/ と /d/ という2つの音素を表記の上で区別しない。これら2種類の音素を表すために、用いられるモンゴル文字は表1. に掲げたとお

① W. Fuchs, A. Mostaert, "Ein Ming-Druck einer chinesisch-mongolischen Ausgabe des Hsiao-ching", *Monumenta Serica* 4 (1939-1940), S. 325-329.


② W. Fuchs, "Analecta zur mongolischen Uebersetzungsliteratur der Yüan-Zeit", *Monumenta Serica* 11(1946), S. 33-64.

表1. 字形の名称 (taw と dāleth)

先古典期			古典式以降		
	taw	dāleth		taw	dāleth
頭位形	𐤀	𐤁	頭位形	𐤀	𐤁
中位形	𐤂	𐤃	中位形	𐤂	𐤃
末位形	𐤄 ^①	𐤅	末位形	𐤄	𐤅

りである。この表に示されているのは、いずれも「同じ」文字の異なった字形である。ここでは、それらのうち縦に並んでいる3つの字形をそれぞれ taw と dāleth と呼んで区別することにする。

表の中の「頭位形」「中位形」「末位形」は、綴り上ひとまとまりに繋げて綴られる単位の最初、中ほど、最後に書かれる字形である。「ひとまとまりに繋げて綴られる単位」というのは、大まかにいえば単語がそれに当たるので、多くの場合「語頭」「語中」「語末」と合致する。しかし、モンゴル文語では、一部の接尾辞（複数語尾や格語尾等）を語幹から離して書くので、この場合語幹や接尾辞が「ひとまとまりに繋げて綴られる」ことになる。

① taw の末位形には  という字形も現れるが、これは下に垂直のびるべき線が、行末等のスペースが足りない場合に横にのばされるものであり、表に掲げた字形に含めて扱う。

さて、表1. に示した数個の字形がモンゴル文語の/t/と/d/を表す「ひとつの文字」を構成していることはすでに述べた。これらの字形は、単語の中に現れる位置と、前後にある文字（音）との関係によって、使い分けられる。これらの「書き分け」は、「古典式」モンゴル文語の正書法では、およそ次のように規範化されている。

1. 語頭では常に **ᠠ** (taw) を書く ^① (/t/と/d/の両方に対応)。
2. 語中では：
 - (1) 母音字の前で **ᠠ** (dāleth) を書く (/t/と/d/の両方に対応)。
 - (2) 子音字の前で **ᠠ** (taw) を書く (/d/に対応)。
3. 語末・語幹末では：
 - (1) 母音字 e を含む 1 音節語で **ᠠ** (dāleth) を書く (/d/に対応)。
 - (2) それ以外はすべて **ᠠ** (taw) を書く (/d/に対応)。
4. 分綴される接尾辞頭では：^②
 - (1) 語幹末が母音字、および子音字 l, m, n, ng で終わっている場合 **ᠠ** (dāleth) を書く (/d/に対応)。
 - (2) 語幹末が子音字 b, d, γ, g, r, s で終わっている場合 **ᠠ** (taw) を書く (/t/に対応)。

かっこの中に示したのはそれらの字形に対応する音素 (/t/と/d/) であるが、「1. 語頭」と「2. 語中の(1)母音字の前」ではひとつの字形が/t/にも/d/にも対応しており、字形からはどちらの音素を表しているかを判定することはできない。

一方、「先古典期」のモンゴル文語ではこれと状況が異な

① /d/の音素で写される外来語では、語頭に **ᠠ** (dāleth) が書かれることがあるが、例外として扱う。

② 語幹から離して綴られる接尾辞の最初の文字を指す。

る。「語頭」および「語末・語幹末」においては「古典式」の場合と異なるところはないように思われるが、問題は、それ以外の位置において見られる。つまり、「語中」と「分綴される接尾辞頭」（以下、単に「接尾辞頭」と略すことがある）では「古典式」の規範に合致しない表記が少なくないのである。

つまり、「先古典期」においては、「古典式」と異なる次のような現象が見られる。

○語中においては：

- (1)母音字の前に **𐰃** (dāleth) だけでなく **𐰄** (taw) も書かれる。
- (2)子音字の前に **𐰄** (taw) だけでなく **𐰃** (dāleth) も書かれる。

○分綴される接尾辞頭においては：

- (1)語幹末が母音字、および子音字 l, m, n, ng で終わっている場合に **𐰃** (dāleth) だけでなく **𐰄** (taw) も書かれる。
- (2)語幹末が子音字 b, d, ɣ, g, r, s で終わっている場合に **𐰄** (taw) だけでなく **𐰃** (dāleth) も書かれる。

要するに、「語頭」と「分綴される接尾辞頭」においては、taw と dāleth の書き分けは、「古典式の」正書法の規範におよそ当てはまらないことが知られている。

しかし、上の場合に「古典式」の正書法に当てはまらないものが少なくないことは事実であるにしても、そこにあるのは果たして「規範からの逸脱」あるいは、単なる「無秩序」であろうか？「先古典期」のモンゴル文語には、「古典式」の正書法とは別に、独自の秩序や規則（規範）が存在したということはないであろうか？

このような観点から、以下では『孝経』における taw と dāleth の書き分けについて調査した結果を示してみたい。

3. 『孝経』における *taw* と *däleth* の正書法

モンゴル語古訳本『孝経』における *taw* と *däleth* の正書法を調査するに際しては、先に「古典式」の正書法についてまとめたそれぞれの場合について検討するが、最も問題となるのが「語中」と「接尾辞頭」における状況である。

3-1. 接尾辞頭における *taw* と *däleth* の書き分け

『孝経』において、語幹と分けて書かれる接尾辞のうち、*taw* もしくは *däleth* で始まるものは全部で119例を数える。現れる接尾辞の種類は次の7種である。^①

1. 単純格接尾辞

- (1)-*da/-de*, -*ta/te* (位格) -----全 8 例
- (2)-*dur/-dür*, -*tur/-tür* (与格) -----全 72 例
- (3)-*dača/-deče*, -*tača/-teče* (奪格) -----全 5 例

2. 再帰所属格接尾辞

- (1)-*dayan/-degen*, -*tayan/-tegen* (位格) -----全 21 例
- (2)-*duriyan/-düriyen*, -*turiyan/-türiyen* (与格) -----全 4 例
- (3)-*dačayan/-dečegen*, -*tačayan/-tečegen* (奪格) -----全 1 例

3. 形容詞派生接尾辞

- tu/-tü* (「～をもつ」) -----全 8 例

① モンゴル文語のローマ字転写方式は、

N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954
によるが、一部簡略化した。

接尾辞頭で *t* と転写するのは「語幹末が子音字 *b, d, γ, g, r, s* で終わっている場合」であり、字形は関係しない。同様に *d* と転写するのも、「語幹末が母音字、および子音字 *l, m, n, ng* で終わっている場合」であって、字形には関係がない。機械的な転写である。

これら全 119 例のうち、**Q** (taw)が書かれているのは 97 例、**𐤀** (dāleth)が書かれているのは 22 例である。その具体的な内訳は次の通りである。

まず、**𐤀** (dāleth) で始まる接尾辞は 22 例あるが、それらは再帰所属格語尾の位格 (21 例) と奪格 (1 例) のすべてである。それらを出現順に列挙すれば、次の通りである。(太字の部分の問題の字形。括弧内は丁数・表裏・行数。// は行末の改行を表す。以下同様。)

sayurin- dayan (2a:3)	eke// -degen (2b:7)
uridus- tayan (7b:1)	ečige- degen (8a:3)
eke- degen (8a:4)	ečige- degen (8a:5)
qan- dayan (8a:6)	uridus- tayan (9a:4)
ečige// -degen (19a:7)	eke// -degen (22a:5)
yekes// -tegen (24b:6)	qan- dayan (27b:7)
eke- degen (27b:5)	aq-a- dayan (28a:1)
beye// -dečegen (30b:2)	ečige- degen (31b:6)
eke- degen (32a:1)	uridus- tayan (32b:7)
uridus- tayan (33a:6)	qan// -dayan (34b:2)
sedkil- degen (35a:3)	eke- degen (38a:4)

これに対して、**Q** (taw)で始まる接尾辞全 97 例のうちには、再帰所属格接尾辞の位格と奪格はひとつも存在しない。接尾辞ごとの内訳は次の通りである。(見出しの接尾辞に付した括弧内の数字は出現回数。)

-da(2)	urtu- da (11a:3, 11a:6)	
-de(2)	eke- de (5b:2)	tngri- de (32b:1)
-ta(4)	ongyod- ta (5b:3)	čidaysad- ta (10b:1)
	aburid- ta (11a:4)	sayid- ta (20a:5)

-te(0)		
-dača(3)	ači- dača (19a:7)	ǰali- dača (20b:7)
	aburi- dača (27a:5)	
-deče(1)	ečige- deče (16b:7)	
-tača(1)	qubčad- tača (06a:6)	
-teče(0)		
-dur(19)	dalai- dur (4a:3)	qan- dur (8b:4)
	bosqui- dur (9b:1)	untaqui- dur (9b:1)
	aburi- dur (19b:4)	sayin- dur (20a:2)
	aqui- dur (21b:4)	aldal- dur (22b:6)
	toǰaysan- dur (23b:6, 24a:1, 24a:3)	
	sayin//- dur (25a:1)	
	dutum- dur (26a:6)	dalai- dur (33b:4)
	oroqui- dur (34b:2)	qariysan//- dur (34b:4)
	uyilaqui- dur (35b:4)	abs-a//- dur (37a:2)
	ǰaryaqui- dur (37a:5)	
-dür(23)	eke- dür (4a:1)	kümün- dür (7b:5)
	üile- dür (8a:1)	üile- dür (9a:5)
	irgen- dür (10a:6)	üile- dür (14a:7)
	eke- dür (15a:3)	büküi- dür (15a:5)
	tngri- dür (17a:2)	tngri- dür (17a:7)
	kümün- dür (19b:3)	törö- dür (19b:6)
	eke- dür (22a:6)	üile- dür (30a:6)
	üegü- dür (30b:5)	kürügsen- dür (30b:7)
	kürügsen//- dür (31a:6)	kümün- dür (34a:5)
	sedkil- dür (35a:4)	töröleküi- dür (35b:5)
	ügüleküi- dür (35b:6)	büküi- dür (37b:6)
	ükügsen- dür (37b:7)	

-tur(5)	dorodus-tur (1b:4)	ulus-tur (13a:3)
	qad-tur (14a:3)	dorodus-tur (32a:5)
	čay-tur (37b:4)	
-tür(25)	bičig-tür (3a:4)	bičig-tür (4a:6)
	bičig-tür (5b:7)	üiles-tür (6b:7)
	bičig-tür (7b:4)	yekes-tür (8b:6)
	bičig-tür (9a:7)	bičig-tür (13a:2)
	tüsimed-tür (13b:6)	ejed-tür (14b:3)
	sibegeğčid//-tür (14b:7)	sür-tür (15a:6)
	bičig-tür (15b:5)	bičig-tür (21a:5)
	üdür-tür (23a:2)	bičig//-tür (27a:2)
	yekes-tür (28a:2)	yekes-tür (32a:3)
	üçüged-tür (32a:4)	ečüs-tür (33b:3)
	bičig-tür (33b:7)	degedüs-tür (34b:1)
	bičig-tür (35a:3)	üdür-tür (36a:5)
	sür//-tür (37b:3)	
-duriyan(1)	qarsi-duriyan (17b:2)	
-düriyen(3)	eke-düriyen (18a:2, 19b:2, 24b:2)	
-tu(5)	ayali-tu (6b:4)	oboy-tu (13a:3)
	todqor-tu (15b:2)	aburi-tu (15b:6)
	ada-tu (20a:3)	
-tü(3)	törö-tü (6b:1)	tülige-tü (20a:3)
	sedkil-tü (21b:7)	

これらを、一覧表の形で示したものが、次ページの表2. である。

以上から導き出すことのできる結論としては、第1に「古典式」の正書法にみられる「語幹末音（文字）の違いによっ

表 2. 接尾辞頭における 𐌲(taw)と 𐌳(dāleth)の使い分け

	𐌲(taw)		𐌳(dāleth)	
-da/-de	4		0	
-ta/te	4	8	0	0
-dača/-deče	4		0	
-tača/-teče	1	5	0	0
-dur/-dür	42		0	
-tur/-tür	30	72	0	0
-dayan/-degen	0		16	
-tayan/-tegen	0	0	5	21
-dačayan/-dečegen	0		1	
-tačayan/-tečegen	0	0	0	1
-duriyan/-düriyen	4		0	
-turiyan/-türiyen	0	4	0	0
-tu/-tü		8		0

て接尾辞頭で taw と dāleth を書き分ける」という規範は『孝経』においては存在しないということである。これは、「規範からの逸脱」とは本質的に区別して考えるべきであり、「古典式」にみられる規範の成立時期の問題と関係してくる。

第2に、『孝経』においては、接尾辞頭の *taw* と *däleth* に関して「形態素による書き分け」が行われていたことが指摘できる。具体的には、再帰所属の位格と奪格の接尾辞では、𐤔(*däleth*)が書かれ、それ以外では 𐤕(*taw*)が書かれている。

3-2. 語中における *taw* と *däleth* の書き分け

『孝経』において、語中における *taw* と *däleth* の現れを見ると、𐤕 (*taw*)が60例、𐤔 (*däleth*)が451例、合計511例が見い出される。これらを、子音字の直前に現れる場合と、母音字の直前に現れる場合とに分けて検討することにする。

3-2-1. 子音字の直前に現れる 𐤕 (*taw*)と 𐤔 (*däleth*)

子音字の直前に 𐤕 (*taw*)が書かれているのは次の26例である。

sedkil (8b:5, 9a:1, 15a:5, 25a:1, 35a:1),
sedkijü (9b:2),
sedkil-i (14a:2, 14b:3, 15a:2, 28b:7),
sedkil-iyer (15b:4, 33a:1, 33a:7),
sedkil-iyen (21b:4, 27b:7, 28a:2, 28a:4, 34b:2),
sedkil-tü (21b:7),
sedkigdekü (31a:2, 31a:4),
sedkil-eče (33b:3),
sedkigčid (34a:2),
sedkigdekü (34b:3),
sedkil-degen (35a:3),
sedkil-dür (35a:4)

一見して分かるように、これらはすべて動詞 *sedki*-「思う」の活用形、もしくはその派生語である。別の観点からすれば、これらはすべて子音字 *k* の前にあるとすることができる。

次に、子音字の直前に **𐰃** (dāleth) が書かれているものは次の 23 例である。

- db-(5): taqul**id**basu (21b:6)
üile**d**besü (29b:3, 29b:7, 30a:5)
sü**id**besü (35b:3)
- dč-(1): tübsiger**idč**ügü (32a:6)
- dq-(16): dur**ad**qu (3a:5) siyu-**ud**quiban (3b:4)
čim**ad**qu (7a:5) tudqar-un (15a:2)
tod**qor**-tu (15b:2) ay**ud**qaqu (24a:6)
ay**ud**qaqu (26a:2) **id**qan (28b:3)
idqayč**in** (29b:2) dur**ad**qayč**in** (29b:6)
dur**ad**qayč**in** (30a:3) dur**ad**qayč**in** (30a:7)
dur**ad**qayč**in** (30b:4) **id**qaqu-yi (31a:2)
idqaqu-yi (31a:3) dur**ad**qaydaqui (31a:6)
- dt-(1): dur**ad**tai (37b:4)

これらの中に sedki- の派生語は含まれていない。-dk- の連続も含まれていない。

以上により、『孝経』では語中の子音字の直前の位置において、動詞 sedki- の活用形・派生語（子音字 k の直前）においては **𐰃** (taw) を、それ以外の位置においては **𐰃** (dāleth) を用いるという書き分けが行われていたことが指摘できる。

3-2-2. 母音字の直前に現れる **𐰃** (taw) と **𐰃** (dāleth)

次に、母音字の直前に位置する場合を見ると、『孝経』全体では **𐰃** (taw) が 33 例、**𐰃** (dāleth) が 428 例見い出される。

そのうち母音字の直前で **𐰃** (taw) が使われているものは、次の通りである。

amidu(36a:7, 38a:2),
amtatu-yi (36a:3),
degedü (16b:4, 16b:6, 16b:7, 17a:2, 19a:6),
kündü (19a:7, 23b:4),
metü (5a:2, 6a:1, 17b:7, 19a:6, 27a:6),
neretü (17a:3),
ordo-yin (17a:5),
qadayatu (24a:6, 25b:7),
uqayatu (13a:3),
uridu (2b:1, 6a:5, 6a:7, 6b:3, 11b:7, 14a:3, 14b:3)
urtu-da (11a:3, 11a:6),
sitü (6a:2, 35a:4),
yosutu (34b:6),
duradtai (37b:4)

これらに共通する特徴としては、最後の1例(duradtai)を除きすべてが、語末・語幹末の u ü o の直前に位置していることが指摘できる。そして、語末・語幹末の u ü o は、同じ 𐤒 (waw) の文字をもって表記される。要するに、それらは語末・語幹末の 𐤒 (waw) の直前に位置していると言うことができる。

母音字の直前の位置には 𐤃 (dāleth) が 428 例存在する。ここでは、個々の例を列挙することをしないが、それらの中に「語末・語幹末の 𐤒 (waw) の直前」という条件に当てはまるものは1例も存在しない。

これらを総合して考えれば、『孝経』では語中で「語末・語幹末の 𐤒 (waw) の直前」には 𐤄 (taw) を用い、その他の母音字の直前には 𐤃 (dāleth) を用いるという書き分けが行われていたと考えることができる。母音字の直前で 𐤄 (taw) が書かれ

表 3. 語中における \varnothing (taw) と \aleph (dāleth) の使い分け

		\varnothing (taw)	\aleph (dāleth)
子 音 字 前	sedki- の派生語 (-dk- のすべて)	26	0
	それ以外の位置 (b, ħ, q, t の前)	0	23
母 音 字 前	語(幹)末の waw の前	32	0
	それ以外の位置	1	428

ている 22 例の単語の多様性をみても、また、同じ単語で uridu (「昔の」、全 7 回) にはすべて \varnothing (taw) が書かれ、uridus (「同(複数形)」, 全 8 回) にはすべて \aleph (dāleth) が書かれているといったことを勘案すれば、これに形態素・意味は関係していないと思われる。

上の推論からすれば、duradtai (37b:4) の t は「語末・語幹末の η (waw) の直前」ではないので、 \aleph (dāleth) が期待される場所であるが、 \varnothing (taw) が書かれている。その理由としては、この字形が -dt- という連続の中にあり、その直前に \aleph (dāleth) が書かれていることが関連していると考えられる。つまり、同じ \aleph (dāleth) の字形が重なることを避けるために taw が書かれたと推定することができる。

3-3. 語頭・語末における taw と dāleth の正書法

語頭においては、『孝経』全体で \varnothing (taw) が 349 回現れ、 \aleph

(däleth)は1回も用いられていない。これは、「古典式」の規範と同じ状況である（例は省略）。

次に、語末および語幹末における状況をみると、『孝経』全体で **ᠲ** (taw)が96回、**ᠳ** (däleth)が2回用いられている。**ᠳ** (däleth)が現れているのは、2回とも ed (4b:6, 10a:2) という語であり、これも「古典式」の規範と同様である。

なお、単語が途中で分綴されていて、後半が **ᠳ** (däleth)で始まっている例がひとつある。üile-dügsen (20b:3)という語であるが、この場合の **ᠳ** (däleth)は「語中で母音字の直前」という条件に合っている。

4. 結語

モンゴル語古訳本『孝経』においては、taw と däleth の字形に関して、「古典式」モンゴル文語の正書法とは全く別の書き分け規則が存在することが明らかになった。

こうした書き分け規則は、しかしながら、『孝経』だけに独自の特徴であろうか、それとも「先古典期」モンゴル文語の他の文献にも共通に存在しているのであろうか？これに関して、筆者は14世紀に属する4基の漢蒙対訳碑文、具体的には「西寧王忻都碑」(1362)、「竹温台神道碑」(1338)、「張應瑞墓碑」(1335)、「雲南王阿魯王子碑」(1340)と、『入菩提行経注釈』(1312)のモンゴル語について、同様の調査を行なった。その結果として、文献によって例外の多寡は認められるものの、『孝経』と同様の書き分け規則が存在することを確認しているが、ここではそれを指摘するにとどめ、詳細は別稿にゆずることとする。

(1996.02.29)